

空を飛びたい

社会福祉法人わこう村 和光保育園（千葉県富津市）

[5歳児]

きっかけ

落ち葉を集めて焚いている時に保育者が、集まって来た子どもたちに、「雲と煙の違いって、知ってる？」と問いかけた。袋に煙を集めてみたり、その匂いを嗅いだりしているうちに、**A児**が「俺さ、空飛んでみたい。そうすれば雲のことも調べられるし、ベットみたいに寝られるかもしれないじゃん」と好奇心を膨らませていった。



活動の展開

《どうやったら…》 計画① 子どもの発想や想像を受け止める

B児「ねえ、私、空の飛び方なら知ってるよ！！いい本があるから来て！」と、保育者と共にA児・C児を連れて園の文庫に行く。B児「ほら」と『ぽっかりこ』（今井弓子 作/教育画劇）という絵本を開いて見せる。

（絵本は、喫茶店のイスに乗ったらイスがクルクル回って空に飛び上がり、雲の上まで行くという内容のもの）

A児「これで飛べるの？」 B児「飛べるよ」 保育者「じゃあ、やってみようか」と促す。そこで、クルクル回るイスと一緒に探しに行き、事務室で回りそうなイスを発見。A児・B児「空を飛びたいからイスを貸してください」そして、B児が「ほら、これやるの」と絵本を見せると、事務のMさんは「そう！！飛べたら教えてね」と貸してくれた。2階デッキで、交代でイスに乗っては思い切り回してみるが、一向に飛ぶ気配はない。何度も絵本を見ては試してみるが…「回し方が弱いよ」「ちょっと無理かも」「もう！どうやったら飛べるんだよ！？」と子どもたち。

《気球をつくろう》 計画② 子どもの発想や想像を具体的に作る

園庭で新米を炊いていた釜戸から蒸気が上がっていることから、保育者が「そうだ！ビニール袋で温かい空気を集めると袋が飛ぶよ」と投げかけてみる。「空を飛ぶ」ことの興味につながればと思いつき実際にやってみると、袋が空高く飛び上がった。

D児「こういうのって“気球”って言うんじゃない」

A児「じゃあ、気球を作ろう」

保育者が図書館で見つけておいた気球の絵本を見てみると、焚き火の温かい空気を集めると浮かぶことが書いてあった。

子どもたち「何で作る？」「さっき、ビニール袋飛んでたよ」

E児「でもあれじゃ小さいよ」 D児「じゃあ、テープでつけて大きくしたら」

子どもたち「いいね」「じゃあ、お家のビニール袋持って来ようよ」

E児「明日みんなビニール袋持って来るの決まりね！指きりげんまんしよう」



翌日、各家庭から持ち寄ったビニール袋をハサミで切って広げ、テープで貼り合わせる。全部貼り終わって広げて持ち上げてみると、畳2枚分位の広さになった。四隅にひもを結んで外に出て広げてみる。

子どもたち「浮かないね～」「もっと風が入った方がいいんじゃない」「青空広場（屋外の2階デッキ）に行ってみよう」風があちこちから吹いてきて、思うように広がらない。

子どもたち「やっぱり火でやらないきゃだめだよ」「じゃあ、火おこしチーム※が火をおこしたらそれでやればいいじゃん」

※火おこしチーム…園庭で拾った枝を使って“火おこし”に挑戦している子どもたち

実践事例集 vol.8 2章-3「そうか！やってみよう」に掲載 http://www.sony-ef.or.jp/preschool/practice/vol8/vol8_201a11.pdf

《大きくても浮くんだ》 計画③ 発想・想像したことを実現する機会を作る

その3日後、「火おこし」に挑戦していた子どもたちが、1週間ほどかかって試行錯誤の末、ようやく火種ができ、点火に成功した。燃え上がる炎を見て保育者が、「あ！！気球！！」火おこしに夢中になって忘れていたのだ。子どもたちと一緒に急いで気球を持って来て焚き火の上にかざすと、ふわっと浮き上がる。「やっぱり大きくても浮くんだ」「でも大人が乗って浮くには、もっと小さくなくちゃだめだね」さらなる挑戦もあったが、子どもたちは焚き火で気球が浮くことが確認できたことで、納得したようだった。



みどころ

「空を飛んでみたい」という好奇心により展開した取り組みです。子どもたちの興味、関心、気付き、疑問などに保育者が丁寧に寄り添い、見通しをもって支えています。やってみようという環境を用意したり、好奇心をくすぐる言葉やヒントを投げかけたり、保育者も一緒に考え試したりすることで、子どもの想像する心、考え創り出す喜び、答えを見つけようとする意欲など、「科学する心」が膨らんでいます。